

現地理解教育の実践

—— ミュンヘンを知る ——

前ミュンヘン日本人国際学校 教諭

大阪府堺市立東陶器小学校 教諭 富士松 諒

キーワード：在外教育施設、国際理解教育、総合的な学習の時間、ミュンヘン、難民

1. はじめに

本単元は、ミュンヘン日本人国際学校の中学部1年の総合的な学習「ミュンヘンを知る」というテーマのもと、年間を通して学習を行ったものである。

ミュンヘンは世界の住みやすい街ランキング8位（2014年）に評価されている。オクトーバーフェスト、英国庭園、市庁舎などの有名な祭りや観光地に加え、電車や飛行機の交通が発達していたり治安が良く親切な人が多かったりとたくさんの魅力が存在する。これらの内容について、調査、情報収集、整理、分析し、発表することで、ミュンヘンを深く知り、自分たちの住むミュンヘンに愛着や誇りをもつことができることを目標とした。

また、2015年夏からドイツを目指す難民が急増し、そのドイツへの玄関口になっているのがミュンヘンである。今話題が絶えないヨーロッパの難民問題を「ミュンヘンを知る」という点で扱った。ドイツ国内でも難民受け入れについて賛否両論があり、政府は受け入れの方針である。しかし、今後どのように変化するか余談を許さない状況にある。これらのヨーロッパの状況を自分なりに考えることで、国際社会の一員としてこれから自分たちができること、すべきことに迫らせたいと考えた。



ミュンヘン中央駅に張られた難民を歓迎する看板

2. 指導について

総合的な学習の観点から、自ら課題を見つけ協働しながら取り組むために、探究的な学習を意識した指導を行った。そのために、①日常生活・社会に目を向けたときに出てくる疑問や関心に基づき、自ら課題を見つけ、②情報を収集し、③その情報を整理・多面的に分析し、自分の考えをもち、④考えや意見をまとめ・表現し、そこからまた新たな課題をもつといった学習活動を展開した。

本生徒が小学部6年の時には、紛争・飢餓・移住に直面している世界の子ども、世界平和について学習してきた。そこで中学部1年では、そこでの学習を出発点としながら生徒の関心をミュンヘンへと移行させるために、まず、カリタスのパネルを用いた活動を行った。具体的にはミュンヘンに移民や難民としてやってきた若者たちがミュンヘンについてどう考えているかを読み取る作業をした。そこで、ミュンヘンの魅力ともいべき点をいくつか発見することができた。それらをきっかけとして、また様々な視点から捉えることを意識させるために、次にドイツに住んでいる人に街角インタビューを行い、さらにミュンヘンの魅力に迫った。最後は、これらに自分たちの考えを加えることで、様々なミュンヘンの魅力を感じたと同時にそれらを詳しく調べたいという興味をもつことができた。また、その中で各自が最も関心の高いテーマを探すことができた。自分たちで決めたテーマは、「サッカー」「交通」「ビール」「歴史や文化」の4つであった。

次に発見した自らの関心テーマについての知識を深めるために、見学や調べ学習を行った。また、それをグループでまとめて、クラスで発表した。さらに、これら学習の成果を、文化祭（ドイツ語学習発表会）で全校児童生徒、保護者、来賓の方々に発表した。文化祭を作り上げる過程で、生徒の各テーマに対する関心と知識はさ

らに深まっていったといえる。これらの様々な活動から、ミュンヘンの魅力を感じ、ミュンヘンへの愛着心・誇りを育み、生徒が帰国したとき、あるいは将来、ミュンヘンの良さを誰かに語れるようになることを期待している。

最後に、このような魅力たっぷりのミュンヘンがまさに今直面している問題である難民問題を取り上げた。この学習を通しては、これまでのようにミュンヘンの魅力のみに迫るということではできない可能性があった。しかしながら、「ミュンヘンを知る」というもともとのテーマを考えたとき、ミュンヘンを様々な観点から多面的に見させたかった。そのことはまた、物事の一面のみを見て極端に偏った愛着心・誇りを持たせないようにすることにもつながると考えた。

進め方としては、後に自分の考えの変化が感じられるように、最初に意見文（知っていること、思っていること）を書かせた。次に、ミュンヘンの現状を知るためにドイツ語部の先生に講話をしてもらった。また、もともとの「ミュンヘンを知る」のテーマからは多少脱線するが、難民問題というヨーロッパ全体に及ぶ出来事を取り扱うことから、さらにこの問題の全体像を把握し、様々な立場や意見を知るという目的のもと、さらに広範囲な情報収集、すなわちヨーロッパ内の他国の見解についても調べた。その後、それらを整理分析させるとともに、自分の意見を加えてクラスで交流した。それによって難民問題について自分の考えを深め、自分たちのできることをみんなで考えていくための準備とした。ふたたび焦点をミュンヘンへと戻し、難民問題をめぐるミュンヘン内の動きや活動、意見についてさらに深く調べた。どのような人たちがどんなボランティア活動をしているのか、どのような団体がどんな意見をもとに難民受け入れに反対しているのか、その中で自分はどのような意見を持ち、何ができるのか、それらを考えさせ、最後にはもう一度意見文を書かせた。

3. 難民受け入れに賛成か反対か（公開授業）

ドイツ政府、ミュンヘン市民（賛成）、ミュンヘン市民（反対）、ヨーロッパの他国の賛成・反対の5つの立場で、難民問題について交流する学習を設定する。それぞれの立場の意見は、本時までに情報を収集しそれらを分析し整理したことを伝えるように生徒に準備させておいた。4つの立場から意見を発表することで、様々な立場から難民問題を捉え、そこから見えてくる課題を考えたり課題の解決方法を考えたりする交流を生徒が創り上げていけるような展開を計画実践した。



公開授業の様子

4. 生徒の意見文

『今を考え、行動する』 中学部1年 Oさん

僕は、難民を受け入れることには反対です。理由としては主に3つあります。

1つ目は、テロについてです。テロを起こす人、つまりISなどの戦闘員が難民の中にいることは確かです。例としては、パリの同時多発テロを挙げましょう。あのテロでは多くの方が亡くなってしまいました。難民を受け入れて良い事をした結果、その中に紛れていた悪い人が人を殺しました。亡くなった方の遺族が悲しい顔で花を供えているところを見ると、自分の家族や友だちを殺されたくないという気持ちが強くなりました。

2つ目は、言語についてです。命からがら逃げてきた難民に必要なものは「ドイツ語」でしょう。しかし、そのドイツ語を教える先生が足りないという事実があります。ニュースでその様子を見てみたら、先生がため息をついていました。そして、難民の生徒は笑いながらドイツ語ではない言語を話していました。情報をたくさん得ていないので、確かなことは言えませんが、難民の人は言葉を覚えようとしていないように感じました。

そして3つ目は、本当に分かり合えるのかと思ったからです。今の難民はドイツの人に感謝をしています。それは事実です。しかし、何十年、何百年も経って世代交代したらどうなるだろうと思いませんか。難民の人にアンケートをした結果、「豪華な家に住めるかと思った」などの贅沢なことを思っていたらしいです。

この3つの理由で僕は反対です。僕は「大事な人や物」を守りたいです。それをテロか何かで失いたくないので、反対です。

『ミュンヘンの今～難民問題を考える～』 中学部1年 Sさん

僕たちは、今のミュンヘンやヨーロッパで大きな問題となっている難民問題について考えました。学習を始めた頃は、難民受け入れに反対でした。しかし、難民に関することをたくさん知った今、僕は賛成に意見が変わりました。

受け入れに反対だった理由は、「差別が起こる」「お金が足りない」「言葉が通じない」などでした。実際ヨーロッパの反対派の人たちも同じような主張でした。

しかし、今このミュンヘンではそれらを防ぐために様々な取り組みをしています。例えば、一般人からの寄付や語学学校などの建設です。このことを知って、「さすがだな」と思いました。寄付についてですが、僕はまだ使えるものを捨ててしまうことがよくあります。しかし、自分が必要のないものが、もしかしたら誰かが必要としているかもしれません。また、寄付したいものを入れるボックスが各地に置いてあります。手軽に寄付できる環境が整っています。このような取り組みを知ったことで、反対から賛成へと変わりました。

さらに、まだ中学生の自分たちでもできることを考えました。1つは、さっきも述べた寄付です。もう1つはお互いのことを知り合うことです。僕もたくさん人の取り組みを知って、反対から賛成に変わりました。たった2つのことですが、この2つで世界が大きく変わると思います。

大人になれば、さらに活動の幅が広がり、ボランティアなどにも参加できます。最終的には難民を難民と思わない感覚で共に暮らせる世界を望んでいます。そのためには優しい心が必要です。しかし、一番望ましいのは、世界から難民が出ないことです。

5. さいごに

4月当初、生徒は自分たちが住んでいるミュンヘンのことをあまり知らなかったが、校外学習や調べ学習を通して、ミュンヘンの魅力に触れることができ、地域に愛着や誇りをもつことができた。また、生徒が自主的に学習を進めてほしいという私の想いから、生徒自身に調べ学習の方法や校外学習の行き先を考えさせた。生徒同士で相談しながら「インタビューがいいのではないか」「実際にオクトーバーフェスト博物館へ行きたい」など計画を立てることができた。文化祭では、生徒はそれまで調べてまとめたミュンヘンの魅力をドイツ語で伝えた。ミュンヘンの魅力が伝わるための工夫や方法を考えさせ、実行させることで、自ら課題を解決する力の育成に繋がった。

また、難民問題を考える際に1つの立場からの意見だけから考えさせるだけではなく、様々な立場（視点）から考えさせた。生徒は、一面的な見方ではなく、総合的に難民問題を捉え、考えることができた。友だちと交流する際には、新たな考えを取り入れようとする態度があった。難民問題の学習では、自分たちにできることを考えさせた。出てきた内容は「ボランティアをしたい」「必要のない服などを寄付したい」など積極的な意見がたくさん出てきた。実際に行動に移せた生徒が何人もいた。寄付をしたり宗教のことを調べたりと学習を発展させられていた。

今回の学習で難しかったことは、情報の扱い方である。生徒はドイツ語での資料や情報を読み解かなければならなかった。ドイツ語部の教員に協力してもらい生徒が欲しい情報は得られたように思うが、言葉の壁は調べ学習の点では効率を悪くさせた。また、メディアリテラシーを生徒に指導して、調べ学習を行わせたが、情報の正誤を判断することは生徒にとって難しかった。ある程度の知識があれば、情報を取捨選択できると思うが、事前の知識が乏しいとネットに載っている情報を全て信じてしまっていたように感じた。これは難しい課題だと思うが、これからのネット社会を考慮するとメディアリテラシーは児童生徒にとって大切な力であり、学校はこの力を児童生徒に付ける役割を担わなければならないと思った。

実を言うと、難民問題の学習は当初は計画をしていなかった。しかし、2015年夏にミュンヘンへ難民が押し寄せてくる事態になり、急遽指導計画を変更した。それは生徒の関心が高かったからである。このように総合的な学習では生徒の興味関心を大切にしながら生徒が主体的に学べる学習を提示することが大切であると改めて感じた。ミュンヘンに住んでいるからこそ行えた学習内容であった。今後この経験を活かし、学校で定められたカリキュラムの中で、生徒の興味関心に沿いながらその土地の環境など様々なことを考慮して総合的な学習の時間をすすめていきたい。